

しばた けんじ
柴田 謙司

停滞感から脱け出す分岐点の年に

●NTT労働組合 中央本部
・事務局長

昨年の本誌への寄稿の結びで「早くも来年に向けた原稿に不安を感じて」と述べたとおりでした。12月初旬の締め切りを意識してから、頭の中で“新年”、“2023”、“うさぎ”等につながるキーワードを駆け巡らせますが、言葉がつながりません。この執筆のタイミングで始まっていたカタールでのサッカーワールドカップ。サッカー同様、パスもつながらないと攻め手を欠きますが、文章も同じです（汗）。

しかし、日本代表は違っていました。「死の組」と言われたブロックの中ですから、大方の予想どおり、守勢に転じることが多くありましたが、ここぞというときのつながりは凄まじかったです。“まさか”、第1戦でドイツに勝てると思っていなかった反動もあったのか、高揚感とともに、社会全体も明るい雰囲気につつまれたようでした。数あるスポーツの中でもサッカーが与える影響力はすごいと実感しました。

そんな中、駅のディスプレイで見かけたある雑誌の見出しに「平成日本の停滞感 サッカーなら打開できる」との文字が。まさにその通りです。「この勢いを来年に」と気が逸ったのは、私だけではないでしょう。しかし、第2戦でコスタリカに足元をすくわれて敗れ、沈滞ムードのまま、第3戦のスペイン戦を観戦。ここで、2回目の“まさか”が起

こるとは。この組で首位通過することを戦前に予想した人は少なかったはずですが、結果、新たな景色(ベスト8)を見ることは叶いませんでしたが、懸命に戦った日本代表に賛辞を送りたいと思います。敗戦後、森保監督が語った「選手たちは新時代を見せてくれた」というとおり、これから先の更なる成長を期待したいものです。

一昨年の後半から、欧米を中心にインフレ傾向にありましたが、昨年のロシアによるウクライナ侵攻が更に世界の中でも低成長を続ける日本を追い詰めているような気がします。エネルギーコストや原材料が高騰し、価格転嫁もジワジワと始まってきました。長らく続いてきたデフレマインドから脱け出して、新たな成長曲線を描けるのか。一方で、価格転嫁に伴い、労働者には生産性向上がより求められてくることとなります。そういう意味で、2023年は日本社会のこれからを占う分岐点にあるかもしれません。迎える春闘も、低水準にある日本の賃金、長期に及ぶ実質賃金の停滞から抜け出せるのか、希望を見出せる結果となるのか、重要な意味を持つこととなります。サッカーがもたらした勢いで結果につながっていけばいいなと漠然と思うものです。

NTT労組は2月中旬には要求内容を決定します。連合や情報労連の方針を踏まえ、これまでの賃金要求の経過と妥結水準に加え、



物価上昇に対する生活防衛的な要素をどう組み込んでいくか、現在、検討の最中にあります。特に、後者については、雇用形態の違いに関係なく、等しく影響が及びますから、ここ数年続けてきた率ベースでの賃金改善要求だけでは、全雇用形態に対して、物価上昇分を吸収させられません。これまでの春闘における労使交渉の経過や、NTTグループの事業の中核である通信分野については、価格転嫁がしづらいことから、交渉も難航を極めるかもしれませんが、分岐点にふさわしい結論を導けるよう頑張らないといけません。

また、様々な意見がある中、組合員の皆さんの理解を得て、4月よりNTTグループの社員に対し、専門性を重視した人事・賃金制度が導入される運びとなりました。重要なのはむしろこれからです。適正な評価運用はもとより、組合員個々人が専門性を高めるための環境が整備されていると感じ取れていなくてはなりません。必要とされるスキルを習得するためには、もちろん、本人の自律性がなくてはなりません。リスクリングするためのツールや時間などの環境整備について、労働組合としての関与、調査を実行していきます。先般、私どもの研修会の場に、連合総研の中村天江さんにお越し頂きましたが、その際、労調協の第5回次代のユニオンリーダー調査も引用され、「労組による教育訓練や能力開発などの人材育成への関与が低い、仕事

内容と賃金が直結していく時代には、その点を高めていく必要がある」と話されてきました。どうやって賃金を上げていくのか、春闘以外で賃金向上に関わる組合員へのアシストの在り方を考えていきたいと思います。

分岐点になるかもしれない2023年にあたって、昨年亡くなられたアントニオ猪木さんが引退する際に述べたプロレスファンには馴染みのある「道」という詩「この道を行けばどうなるものか 危ぶむなかれ 危ぶめば道はなし 踏み出せば その一足が道となり その一足が道となる 迷わず行けよ 行けばわかるさ」が頭をよぎります。この詩を話す前に、同氏は「人は歩みを止めた時に、そして挑戦を諦めた時に年老いていくのだと思います。」と述べています。年のせいか、鍛錬を怠ることも多くなっている気もしますが、それではいけないと自身に言い聞かせなくてはなりません。また、このことは労働組合にも求められているかのようです。「組合員意識実態調査」でも明らかになっていますが、組合員が求めていることに労働組合がフィットしきれていない部分もあります。

本来、“うさぎ”にちなんで、飛躍と言いたいところですが、その一歩、その一足を踏み出していくための難問を解き続ける年にしてみようかと思っています。